

外国語教育メディア学会(LET)
第85回 (2015年度春季)
中部支部研究大会

プログラム

日時： 2015年5月23日(土) 9:30-17:00

会場： 椋山女学園大学

〒464-8662 名古屋市千種区星が丘元町17番3号

会場校実行委員長： 木村 隆 (椋山女学園大学)

会場校実行副委員長： 深谷 輝彦 (椋山女学園大学)

主催： 外国語教育メディア学会(LET)中部支部

後援： 愛知県教育委員会・名古屋市教育委員会



問い合わせ先：

メール：支部サイト(<http://www.letchubu.net>)の「お問い合わせ」

外国語教育メディア学会(LET)中部支部事務局 あて

Twitter: @LETChubu

日程

9:30 受付 【国際コミュニケーション学部棟4階 419 教室前】

9:30 展示 【419 教室】

10:00-10:10 **開会式** 【417 教室】

司会：木村 隆（椋山女学園大学）

主催者挨拶：高橋 美由紀（LET 中部支部支部長）

開催校挨拶：小澤 英二（椋山女学園大学国際コミュニケーション学部長）

10:20-11:40 **講演** 【417 教室】

反転授業から学ぶ ICT 利用による産出・創造活動の支援

— m ラーニング、無償ツール、クラウドの活用

講師：神田 明延（首都大学東京）

講演司会：鈴木 薫（名古屋学芸大学短期大学部）

講師紹介：高橋 美由紀（LET 中部支部支部長）

グローバル化、情報化が強調される時代になり、これまでの理解と記憶を主にする学習観ではなく、協調・創造等を含めた学習活動が求められるようになってきた。言語教育におけるこうした高次の学習活動を活性化するツールとして ICT の活用法をここでは取り上げたい。ただし e-Learning、Blended Learning、Mobile Learning などと言うと、一体どこから手をつけていいかと途方に暮れる場合もあるかもしれない。そこで、それらを手軽に用いて昨今話題となっている反転授業の言語教育における意義や実態から考えて、たとえ反転授業でなくても創造・産出活動に役立つ諸々の手軽な敷居の低いツールの紹介と実践例をお見せしたい。また併せて反転授業における様々な授業設計モデルを見て今後より良い授業の構築を考えたい。

11:40-12:40 **昼食**

Self Access Center ミニ・ツアー

（ご興味のある方は、12:15 に受付前にお集まりください。）

12:40-13:00 **総会** 【417 教室】

13:00-15:15 **研究発表・実践報告**

<第1室>(1)13:00-13:30 (2)13:35-14:05 (3)14:10-14:40 (4)14:45-15:15 【415 教室】

司会：伊藤 佳貴（大同大学大同高等学校） 西尾 由里（岐阜薬科大学）

- (1) ミドルエイジからの CALL を活用した英語学習：異なる学習プログラムの取組
鈴木 薫（名古屋学芸大学短期大学部）
- (2) TPR を用いた英語スピーキングに対する抵抗感への対応：大学生に対する効果とその個人差
天野 修一（静岡大学）
- (3) 学習者理解のための高校英語授業調査に基づくシラバス作成
永倉 由里（常葉大学短期大学部）
- (4) 工学的アプローチによる Self-Access Center 環境改善の持続的実践
加藤 鉄生（中部大学）

<第 2 室>(1)13:00-13:30 (2)13:35-14:05 (3)14:10-14:40 【420 教室】

司会：坂東 貴夫（金沢学院大学）石川 有香（名古屋工業大学）

- (1) シャドーイングにおける口唇映像活用の可能性
古泉 隆（名古屋大学）
杉浦 正利（名古屋大学）
- (2) 外国語における文法的慎重性と性格特性
川口 勇作（名古屋大学大学院生）
後藤 亜希（名古屋大学大学院生）
草薙 邦広（名古屋大学大学院生・日本学術振興会特別研究員）
- (3) 英語学習者の聴解時の Late closure・Early closure の処理における韻律情報の影響
後藤 亜希（名古屋大学大学院生）

15:25-17:00 シンポジウム 【417 教室】

「授業における効果的なアウトプットについて」

コーディネーター：柳 善和（名古屋学院大学）

「コミュニケーション活動を中心にした英語指導の実践」

パネリスト：南谷 守（一宮商業高等学校）

本発表では、コミュニケーション活動を中心にした授業実践について報告します。最初に、いわゆる「英語力」をどのように捉えているかを説明します。実際に使用した教材を用いて具体的な授業の内容について述べます。授業でのコミュニケーション活動の準備を予習として課し、授業ではこの準備してきたことに基づいて少し異なる観点からペアやグループで学習を進めるといふ、アクティブラーニングの考え方を取り入れているところが特徴です。コミュニケーション英語では、思考力と言語力を同時に育成するため、フェーズ (Phase) という考え方を取り入れた展開をしています。英語表現では、「場面や談話の展開の中で表現を理解し使う」という考え方に立った授業展開をしています。こうしたコミュニケーション活動を授業の中心に据えた結果、生徒たちの学びに主体性と責任感が生まれ、自律した学習者の育成に展望が開けてきました。

「大学の英語授業における効果的なアウトプット」

パネリスト：柴田 里実（常葉大学）

授業における効果的なアウトプット」とは何かを大学という文脈で考えると、正課教育と準正課教育の両側面から考える必要がある。多くの大学では、正課教育だけでなく準正課教育も含め総合的に、学生の主体的な学びを支援する仕組みを提示している。そこで、本発表では、第一に大学における正課の授業内でアウトプットを促進する基盤として、日本人講師が英語で授業を実施することを学生はどのように捉えているのか、また英語で授業を実施する上でどのような障害があるのかを発表者の担当してきた授業事例をもとに提示する。第二に、準正課活動として発表者が勤務する大学での外国語学習に特化したセルフアクセスセンターでの活動を中心に提示する。特に、3つの活動（ネイティブ教員による予約制英会話、日本人教員による英会話練習、スピーチコンテスト）を示し、なぜ利用者が増加したのか、あるいは増加していないのかを事例をもとに提示する。

「外国語教育におけるアウトプットを促す活動の理論的背景」

パネリスト：福田 純也（名古屋大学大学院生・日本学術振興会特別研究員）

学習者が第二言語を身につける際には介入的指導は必須ではない。しかしながら、さまざまな方法により学習者の認知的プロセスを適宜促すことによって、学習者はより効率よく、そしてより高い習熟度まで外国語技能を向上させることができる。アウトプットは目標言語使用におけるさまざまな側面の処理を促すことが知られている。そして、学習者はアウトプットを通して使用された処理を自動化させることができ、さらに後続するインプットをよりよく処理させるようにすることもできる。本発表では、外国語教育において提案されている種々のアウトプット活動は、それぞれどのような心的プロセスを促すと期待されるかを、第二言語習得研究によって得られてきた知見を参照しつつ整理していく。それらの整理に基づき、学習者は個々の活動を通して目に見えない認知的プロセスのどのようなものを促進させることができ、その結果としてどのような側面の技能を伸長させることができるのかを考察する。

17:15-18:45 懇親会

【シーザーズカフェ（大学会館2階）】

開催校挨拶：木村 隆（椋山女学園大学）

.....

研究発表概要

<第 1 室>

発表 1 ミドルエイジからの CALL を活用した英語学習：異なる学習プログラムの取組

鈴木 薫 (名古屋学芸大学短期大学部)

発表者が CALL を活用した自律学習支援プログラムとして、ミドルエイジ以降の社会人を対象に実践した 2 種類の学習プログラムの取組を紹介する。学習カウンセリング後に教材を自由選択する学習プログラムと、英語音声に特化した共通教材を利用する学習プログラムについて報告する。これらの取組における学習管理・ドロップアウト・学習達成度の状況や効果測定の結果を解析し、プログラムの種類の違いが与える影響やそれぞれの学習効果について検討する。特に英語音声に特化したプログラムについては、加齢が進むと困難になることが予測される英語音声のリダクションフォームの識別について詳細な分析を試み、音声学的見地から考察する。それぞれのプログラムの実施の際に随時行ったインタビュー調査から、社会人学習者が求めている英語力とは何かや、学習プログラムの違いによって生じた学習コミュニティのタイプの違いについても報告する。

発表 2 TPR を用いた英語スピーキングに対する抵抗感への対応：大学生に対する効果とその個人差

天野 修一 (静岡大学)

本発表の目的は次の二つである。まず一つは、折り紙を用いたトータル・フィジカル・レスポンスとそれに関連する教室内活動によって、英語スピーキングに対する抵抗感を軽減することを試みた先行研究 (Amano, 2014) の追認調査を行うことである。もう一つは、その実践の有効性が、学習者が抱える抵抗感の程度によって異なるかどうかを調査することである。非英語専攻の学部 2 年生を対象とする実践と調査の結果、多くの学習者に関して、自分自身の英語を話す能力についての認知を改善し、英語を話すことへの不安を軽減し、英語を話すことを避けたいという気持ちを抑える効果が認められた。ただし、全員様に効果があったのではなく、授業開始当初の抵抗感が高い水準にあった学習者に対しては有効であったが、そうでない学習者の抵抗感をさらに引き下げるには、必ずしも有効ではなかった。実践の具体的な内容については、できるだけ詳細に報告したい。

発表 3 学習者理解のための高校英語授業調査に基づくシラバス作成

永倉 由里 (常葉大学短期大学部)

本発表では、「学習者理解」のために実施した「高校英語授業」調査等の結果を紹介し、それらに基づいて作成した大学 1 年生対象の教養教育科目「英語コミュニケーション I (必修科目)」のシラバスを示すことにより、大学英語教育のあり方の一例を提案する。

毎年新入生を迎えるたびに、そこに至るまでの英語学習経験、学習スタイル、目的意識など様々な点で、多様性を強く感じてきた。そこで、2つの調査 (①英語学習に関する目的意識と②高校英語授業における学習活動、2013・2014 年度、延べ 191 名) の結果から、対象学生の実情とニーズに応える授業計画を作成した。

現在、シラバスとして「目標」「内容」「評価」を明示し、調査の結果を学生と共有した上で、私がこれまで取り組んできたストラテジー・トレーニング (英語学習者としての自己理解を深め、効率よく学習を継続できる自律学習者の育成を目指すもの) としての授業を実践し、授業の改善と授業力の向上に努めている。

発表 4 工学的アプローチによる Self-Access Center 環境改善の持続的実践

加藤 鉄生 (中部大学)

発表者は教育技術員として語学教室と SAC (Self-Access Center) の設備機能の維持と改良・更新を業務とし、語学教育支援を実践して来た。Lincoln (2003)、藤原・小森 (2007)、Harmer (2007) を指標にした技術的支援について、2010 年に LET 中部支部でその実践報告した。その後も、柴田 (2010)、小島・尾関・廣森 (2011) らを参考にしながら、勤務校の SAC の継続的環境改善の道を模索してきた。本発表は、実際に SAC に効果的な語学教育支援機能を導入する上で、発表者が実践してきた工学的アプローチによる SAC 環境改善の持続的実践について報告するものである。

本実践には外国語教育や心理学、教育学などでの先行研究の中から、自律学習支援に関係する知見を、勤務校の SAC 環境の改善に活用し、その成果を確認・共有するものである。SAC の語学学習支援機能改良の中でも比較的低予算で継続的に機能改良を行っていくための取り組みについて、実際に発表者が取り組んだ工夫を取り上げる。発表者の環境のように、設備の追加投資が難しい環境であっても SAC の機能改良に継続的に取り組めるといふ事例を紹介することで、SAC の有用性の認知を拡げ、一人でも多くの自律的な学習者育成の一助となれば幸いである。

<第 2 室>

発表 1 シャドーイングにおける口唇映像活用の可能性

古泉 隆 (名古屋大学)

杉浦 正利 (名古屋大学)

Koizumi & Sugiura (2015) では、日本人大学生 32 名を、音声のみを提示する群 (A 群) と音声+口唇映像を提示する群 (AV 群) に分けてシャドーイング訓練を実施し、母語話者が文単位で発音の評価を行った。結果、口唇映像提示の発音向上効果は確認されなかったが、原因の一つとして、手本とすべき口唇動作に学習者が十分気付かず全体として評価に貢献しなかった可能性があげられる。本研究では、前述研究の口唇映像で、学習者が気付きやすいと思われる比較的顕著な口唇動作箇所 (weekend の /i:/) に焦点を絞り、訓練前後のフォルマント値 (F1, F2) を測定した。結果は、F1 の増減に関して両群に差はみられなかったが、F2 に関しては A 群よりも AV 群のほうで増加した人数が多かった。発表では、Koizumi & Sugiura (2015) および本結果をもとにシャドーイングにおける口唇映像活用の可能性および今後の研究課題について議論する。

発表 2 外国語における文法的慎重性と性格特性

川口 勇作 (名古屋大学大学院生)

後藤 亜希 (名古屋大学大学院生)

草薙 邦広 (名古屋大学大学院生・日本学術振興会特別研究員)

本研究の目的は、外国語における文法的慎重性 (GC) と性格特性との関係性を探ることである。外国語における文法的慎重性とは、Kusanagi et al. (2015) が提案する新しい構成概念であり、外国語の使用にかかわる学習者固有の行動的・心理学的特性である。GC が高い学習者は、外国語を使用するとき、速さよりも正確さを優先し、より意図的、統制的、および分析的な言語運用をする傾向がある。GC を測定する尺度 (FLGCS) は、さまざまな側面における妥当性の証拠をもつが (e. g., Kusanagi et al., 2015; Tamura & Kusanagi, 2015)、もっとも一般的な学習者要因ともいえる性格特性との関係については、依然として不明である。そこで本研究は、大学生 (n=414) を対象として、FLGCS および性格特性を測定する Big Five 尺度短縮版 (並川他, 2012) の回答を得た。多変量解析をもちいて回答を分析した結果、FLGCS と性格特性の相関関係は、全体的に強くないことがわかった。これは、GC の弁別的妥当性の証拠の一部を示すと考えられる。発表では、GC とそれぞれの性格因子との関係を教育的観点から考察する。

発表 3 英語学習者の聴解時の Late closure・Early closure の処理における韻律情報の影響

後藤 亜希 (名古屋大学大学院生)

本研究は日本人英語学習者の聴解時の Late closure・Early closure 文の処理における韻律情報の影響を明らかにすることを目的とする。先行研究において音声提示された統語的曖昧文の処理は統語と韻律との整合性がない場合に阻害されることが示されてきた (Harley, Howard & Hart, 1995; 中村, 2009)。一方でこうした研究の多くは語彙や意味といった韻律以外の情報が文処理に影響を及ぼしている可能性を排除できておらずまた韻律そのものが文処理に及ぼす影響を明示できていない。そこで本研究では英語の熟達度が異なる学習者を対象に統語的曖昧性のある文の一部を音声提示しその文が Late closure か Early closure かを選択する課題および韻律情報を削除した音声を用いた同様の課題を行った。結果、韻律情報によって音声提示された文の統語構造の把握は促進されることが示された。また学習者の熟達度に関わらず韻律情報は統語的曖昧性の解消のための手がかりとして用いられる可能性が示唆された。

.....

賛助会員展示

- ・チエル株式会社: <http://www.chieru>.
- ・リアリーイングリッシュ株式会社: <http://www.reallyenglish.co.jp/>
- ・電子システム株式会社: <http://densys.jp>

昼食

- ・当日は学生食堂は休業です。
- ・最寄りの星ヶ丘駅付近にレストランやカフェ等が多数ありますが、休日には大変混み合いますので、お弁当等を用意されることをお勧めします。
- ・地下鉄星ヶ丘駅付近にサークルK、ミニストップ等のコンビニがあります。駅構内のコンビニでもおにぎりやパンなどを買うことができます。
- ・10 時からは三越星ヶ丘店のデパ地下食品街が利用できます。

懇親会

- ・シーザーズカフェ (大学会館 2 階) <http://www.sugiyama-u.ac.jp/univ/campus/life/dining/>

大会参加のご案内

■会員の方の参加費は無料です。(ご参加までに、年会費をご納入下さい)

■非会員の方は当日会員参加費 1,000 円を受付にてお支払い下さい。

■新規ご入会案内

LET 会員として入会手続きをしていただきますと、当日参加費から無料になります。会員になられますと、LET 全国研究大会、支部研究大会(年2回)での研究発表、紀要への投稿などをして頂くことができます。

- ① 当日会員参加費として1,000 円をお支払いください。
- ② LET 本部サイトにて入会登録をしてください。(仮会員)
- ③ 仮会員となられましたら、後日年会費をご請求申し上げます。(お支払い頂いた当日会員参加費 1,000 円を割引きます)
- ④ 正会員となります。

LET 本部サイト <http://www.j-let.org/>
会員登録、会員情報の更新はこちらから

LET 中部支部 Web サイト: <http://www.LETChubu.net>

本大会サイト: <http://goo.gl/gDM1Dk>